

幻の子ども像を追う 大人たち

現代・子育て事情の側面

1975年の「朝日中学生ウィークリー」創刊のとき、記者になって以来、ずっと教育の分野で取材し、書き、語ってきました。所属する新聞は変わり、フリーになり、仕事の形態は変化しつつも、1977年に男の子をひとり授かったこともあって、教育から母親の問題、夫婦のこと、夫たちの労働のこと、家族の変化、当然「いじめ」、家庭内暴力、とじこもり等々、その時代の生活そのもの取材しました。そしていつの間にか30年以上たっていました。

時代毎にいろいろな変化を見聞きして、疑問に思えば現場を歩き、結論が出ないままその変化を書く、それを続けているうちにいろいろな人から教えられ、自分でも考え、ある日その原因らしきものにハッと気がつく、そんなやり方で来まし

た。その心の底には、勉強ぎらいで、得意なのはバイクとスポーツのみという一人息子に不安になり（いま思うと何が不安だったのか、おかしくなりますが）、その反抗期のすさまじさに私の方が脅え悩み（やはりいま思うと、なぜ私が脅えなきやいけないのだ！）という、母親としての悩みが常にありました。仕事と言いながら実は自分の問題と重ねての日々でした。

母と子・父と子の関係、父と母、子育て、家族などの「変化」は私にとってはいつも、いきなりやってきました。ここ7、8年前からまた大きな変化を感じるのは、（1）「子育ての方法」への不安のあり様と、（2）母親同士の人間関係の困難さです。そして、（3）その背景と、考えてみたいと思います。



青木 悦

教育ジャーナリスト

【あおき えつ】1946年高知県生まれ。「朝日中学生ウィークリー」「ふえみん」記者を経て現在フリー。いじめ、虐待など取材し、執筆すると共に、全国で講演している。2012年5月から福島市在住。

1 子育ての「方法」について

ある小さな市民講座で、若い女性が質問しました。

「私、下の子にオッパイをあげるとき、上の子ども（3歳）にいつも、赤ちゃんにオッパイあげていい？ と聞くようになってきました。はじめはいいよと言っていた上の子がこのごろイヤだと言うのです。説得するのですが結局は泣いてしまつて、私もそのうち、何と思いやりのない子どもと上の子にハラが立つてきて……」

最後の方は彼女は涙声でした。上の子は講座の保育室に預けたらしく、下の赤ちゃんを抱えています。私は、彼女を責めないで、この悩みをどう解決できるか考えます。でもどう言ったところで、子



育ての先輩の意見は「責める」部分を持つのだからと、次のように言いました。

「なぜ、赤ちゃんにオッパイをやっている？ なんて、上のお子さんに聞くの？ おそらくあなたのなかに、『子どもは平等に育てなければならぬ』という情報が入っていて、授乳のとき、上の子どもがさみしくならないようにと気をつかうからではないかと思いますが」

彼女は涙をふきながら強くうなずき、

他にももうなずいている講座参加者の姿があります。

「でもね、ちょっと考えてみて。赤ちゃんにオッパイやらないと、赤ちゃん、死んじゃうよねえ。上のお子さんが赤ちゃんのときも一生懸命オッパイやってきたんでしょ？ だったらそんなこと考えなくていい。赤ちゃんのオッパイ最優先、上のお子さんにもそんな姿を見せて、よく飲むねえ、元気な弟でよかったねえ、

あなたもたくさん飲んだわよ、と言ってやればいいのです。授乳のときというのは、よく言う命の大切さを子どもに実感させるチャンスです。

上のお子さんに思いやりがないなんて、そんなこと言ったらかわいそうですよ。いつもオッパイやっていると聞かれ、はじめはどう答えたらいいか戸惑ったと思いますよ。そのうち何度も聞かれるから、もうめんどうくさくなって、その状態をイヤだと言っているように思います
が……」

子育てにからむたくさんの「情報」が、いろんなところから集まってきました。自ら育児書を求めたりしなくても、元々不安ななかで子育てをしていますから、そこにつけこむように「情報」は入りこみます。この例ですと「兄弟は分けへだてなく平等に育てましょう」という情報が、彼女を支配してしまったのでしょう。

他にも「3歳までは母の手で」なんて「情報」は40年も昔から言われてきました。この「情報」の真の意味は「(人間でもライオンでもミミズでも) 生き物はその寿命の始まり、3歳ぐらいいまでは、母なるもの手で育つことが望ましい」です。つまりあらゆる生き物はその揺籃期ようらんは落ちついた環境で育つことが望ましいということです。「母の手」と「母なるもの手」では全然ちがいます。生みの母だけが育てるということではない、父で

も祖父母でも伯父伯母でも保育士でも児童相談所の職員でもいい、みんな「母なるもの」ではないでしょうか。そして私たちは、この母なるものを増やし充実させていかなければ、虐待も、心中も、少子化も防げないと思います。

2 ママ友のストレス

2、3年前になりますが、母親が「幼稚園に行きたくない」と泣いて訴えてくることがあります。子どもを幼稚園に送っていくのがつらいと言うのです。ずっと前は幼稚園に行きたくないと言って泣くのは子どもの方でしたので、私はやはり、はじめは戸惑いました。そして、そういう人がひとり、ふたりではないことを知り、取材を始めました。

その結果わかったことは、幼稚園で出会った他の子の母親たち、つまりママ友とのつきあいがつらいということでした。つらさの主な原因は、その母親グループの誰かにお茶とか誘われても断れないという点でした。

私は1946年生まれで60代です。この年代にとってはなかなかわかりにくい話でしたが、「それはおかしい！」と決める前に、この人たちの気持ちのなかに何があるのかと聞いていきました。なぜ断れないのか ①断るとその場の楽しい空気がこわれる ②次から誘ってもら

えなくなる ③そうすると、うちの子は誰とも遊んでもらえなくなる ④私は母親なのだから、そこはガマンをしなればと思うけれど、そう思えば思うほどつらくなり、身体が動かなくなる――。

この状況は、30年間ずっと取材してきた子どもたちの「いじめ」と心情的にそっくりです。「いじめ」の始まりはたいていこの「その場の空気をこわしてはいけないと思う」ところから始まり、イヤイヤつきあっているうちに相手の子どもたちはそれをいいことにいろいろなチョッカイを出してきます。私たちは「いじめ」がとてもしどくなつてから気がつきますが、はじめは「私はイヤです」と言えない関係にあるのです。子どもたちはまわりの目を気にし、ハズされないようにと気をつかいます。

そう、いま子育て中の大半の父と母は、その子ども時代に「いじめ」を体験しています。「いじめ」られたり「いじめ」たり、それと一切関係なく学校生活を続けられる子はいないと言っていると思っっています。不登校がそのことと強くからみます。「学校に行きたくない」と認識するより前に身体が動かなくなるのです。先述の、ママ友のことを考えると身体が動かなくなる母親たちと同じです。

私は自殺されるぐらいなら登校を拒否してほしいと思います。心からそう思いますが、学校に「適応」できない子は社

会にも「適応」できないと不安を抱く人が多いため、子どもの自死は跡を絶ちません。友だちからの「いじめ」にしろ、教員からの「体罰」にしろ、心から苦しい場所からは逃げてほしい、身体（心も肉体も）的に苦しいことから逃げることは生きる力なのです。命と引き換えに行くとところなど、どこにもないのです。

3 背景を考える

3歳の子がテーブルの前できちんと食事できないことにイラつき、結局死に至らしめた事件、4歳の子が近所の人にあいさつしないと行って殴って蹴って重傷を負わせた事件、枚挙にいとまがないこの種の事件の背景には「しつけ強迫症候群」があります。

2008年、東京・秋葉原で群集の中に車を取り入れ、刃物をふりまわし、7人の人を死なせた25歳の若者の事件が起きました。原因は労働状況、ネット社会などいろいろ重なっていると思われませんが、裁判報道のなかにあったひとつの事実、他人事ではないという点で注目しました。それはこの若者を育てた母親のなかにある「間に合わない症候群」です。

彼は出身県のトップクラスの進学校を卒業しているのですが、そこに入学させるため、母親は必死だったといえます。彼は食事を摂るのに時間がかかるタイプ

だったようで、お母さんはイラつき、虐待と言っているやり方で彼を責めたというのです。食事を摂るスピードが遅いことと、トップ校に入学することとの間にどんな因果関係があるのかと問うた人もいますが、その人は子育て経験の無い人でした。

「いい学校」にいれようとすれば、内申点のためにはとても「いい子」が要求されます。朝は起こされなくてもひとりですわやかに起きて、清潔な衣服を速やかに着て、何でも好き嫌いなくモリモリ食べ、元気に家を出て（玄関にしゃがみこんだりせず）、近所の人に会えば向こうからあいさつされる前にさわやかにあいさつして……こんな、子どもが要求されず。私はこれを、存在しえない幻の子ども像を追っていると感じてきました。

幻の子どもはきちんと「しつけ」られ、何でも「素速く」できなければいけません。「しつけ強迫」の上に、いま多くの親たちはこの「間に合わない症候群」も抱えています。そしてこの両者の根はひとつで、子どもを早い段階からまるで大人のように育て、他の子より1点でも多くとれる、一歩でも速く走れる子にしなければという価値観の時代の産物です。

いまの子育ては、人間社会は競争だけではもはや世界の人と共に生きることができないとわかっているのに、やはりわが子には一歩でも先を、わが子の勝利の

ためにという時代に合わない大人たちの競争原理の下支えです。親も、教員たちも、何のために子どもをがんばらせるのでしょうか。いま3歳のわが子、いま10歳のわが子の「いま」は二度とないのだから、いまを大切に共に生きていこうとなぜ思えないのでしょうか。

すさまじい反抗を見せたわが息子が反抗期のことをほとんど記憶していないというので、執念深く覚えている私は、「中間テストの前日、私がこう言ったら、

あなたは怒って机をたたいてこう言った」などと、言いつのりしました。すると30歳目前の息子はボソツと言いました。

「それは悪かったですねえ。そういえば僕、学校でものすごく気をつかっていた。クラスでも部活でも。家では全く気をつかわなかった。それが親を苦しめていたとしたら、すみませんでした」。私は思わず「いいえ、どういたしまして」と言った後、心の中で思いました。「気をつかわなくて済む場所があつて、よかった」と。

